

種生物学会ニュースレター

The Society for the Study of Species Biology Newsletter No. 59



第58回 種生物学シンポジウム（新潟）のご案内 1

第59回 種生物学シンポジウム（香川）の開催について 4 / 第57回 種生物学シンポジウム（東京）の記録 5 / 事務局からのお知らせ 9 / 会計報告 10

第58回種生物学シンポジウムのご案内 （新潟）

<https://sites.google.com/view/sssb58/>

（10月10日公開）

第58回となる本年度の種生物学シンポジウムは、合宿形式で12月11日（金）～13日（日）に開催いたします。開催地は、新潟県妙高市にある国立妙高青少年自然の家（<https://myoko.niye.go.jp>）です。

学会員の方は、シンポジウムウェブサイト（<https://sites.google.com/view/sssb58/>）に記載の案内に従って申し込みをしていただければ、どなたでもご参加およびポスター発表を行っていただけます。種生物学会恒例の合宿形式ならではのアットホームな雰囲気の中、夜遅くまで白熱する議論をぜひお楽しみください。

今回のシンポジウムは、昨年度と同様、研究発表としては、片岡奨励賞受賞講演、ポスター発表、国際シンポジウム、和文誌シンポジウムを予定しています。

国際シンポジウムでは、葉の「色」の研究に取り組む研究者を中国・アメリカを含む国内外から招き、葉の色と生物間相互作用との興味深いつながりについて知見を得る場といたします。

また、和文誌シンポジウムでは植物の「かたち」をテーマに、力学的な視点から植物の進化を研究している方を招きます。物理学と生態学をつなぐ場となり、新たな視点を得られる良い機会となることと思います。

今年も幅広いジャンルの研究発表が揃いますので、ぜひ身近でご関心を持ちそうな方にもお声がけいただき、にぎやかな大会にしてみたいと思います。

みなさまのとおきの研究を持ち寄り、種生物学会らしい白熱した議論に花を咲かせていただければ幸いです。新しいご発表や昨年からの進展を伺えるのを、実行委員一同とても楽しみにしております。どうぞ奮ってご参加ください。

● 開催方法：オンサイト

国際シンポジウム・和文誌シンポジウムのオンライン配信の有無についてはシンポジウムウェブサイトをご確認ください。

● 全体のスケジュール

12月11日（金）

- 13:30-15:30 各種委員会
- 15:30-18:00 幹事会
- 16:00-18:00 受付開始・ポスター貼付
- 18:00-19:00 開会の挨拶・夕食
- 19:00-20:00 片岡奨励賞受賞講演
- 20:00-22:00 交流会（食堂・ポスター会場にて）

12月12日（土）

- 07:30-08:30 朝食

申込締切は 11月4日（水）です

※ ポスター発表要旨登録締切は 11月13日（金）

※ 当日参加は日帰りのみ受け付けます。



←シンポジウムウェブサイト
はこちら

08:30-10:00 ポスター発表 (奇数コアタイム)
10:00-11:30 ポスター発表 (偶数コアタイム)
12:00-13:00 昼食
13:00-16:15 国際シンポジウム
16:25-16:40 集合写真撮影
16:40-17:10 和文誌シンポジウムライトニングトーク
17:10-18:40 総会
19:00-21:00 懇親会
21:00-22:00 交流会 (食堂・ポスター会場にて)

12 月 13 日 (日)

07:30-08:30 朝食
08:50-11:50 和文誌シンポジウム 午前の部
11:50-12:40 昼食
12:40-14:40 和文誌シンポジウム 午後の部
14:40 閉会

●国際シンポジウム

Empirical perspectives on leaf color in plant–animal interactions

『植物–動物相互作用における葉の色についての実証的視点』

12 月 12 日 (土) 企画者: 樋口裕美子 (京都大学)

植物の葉は基本的に緑色ですが、新葉や紅葉の時期、食虫植物や斑入り植物など、緑以外の色彩を呈する場合も少なくありません。葉の非緑色の発色は、主として老化などの内的要因や、光などの非生物的環境要因に対する生理的応答と関連づけて解釈されます。一方、こうした葉の色は動物の行動を変化させ、被食防衛や送粉などの生物間相互作用にも影響する可能性があります。しかし、花や果実の色に比べると、生物間相互作用における葉の色の役割を調べた研究は少なく、その作用機序に対する実証的知見は限られています。

本シンポジウムでは中国・アメリカを含む国内外の研究者を招き、カムフラージュや警告色、動物への誘引などに対する葉の色の効果を実験的に検討した最新の研究事例についてお話しいたします。講演を通して植物–動物相互作用における葉の色の研究の現在を皆様に共有させていただくとともに、植物の葉の色彩の多様性と進化について考える機会としたいと思います。

講演者・タイトル:

Yang Niu (オンラインでの講演)

(Kunming Institute of Botany, Chinese Academy of Sciences, China)

"The evolution of plant camouflage in SW China"

Jun-Ya Ide

(Department of Education and Creation Engineering, Kurume Institute of Technology, Japan)

"Antiherbivory roles of red and purple coloration of young leaves"

Sylvie Martin-Eberhardt

(New York Botanical Garden, USA)

"How pigments shape complex ecological interactions: mutualism, herbivory, and plant carnivory"

Yumiko Higuchi

(Center for Ecological Research, Kyoto University, Japan)

"Does leaf mottling function as camouflage in *Erythronium japonicum*?"

コメンテーター:

Atsushi Kume

(Faculty of Agriculture, Kyushu University, Japan)

※詳細なタイムテーブルは検討中です。

●和文誌編集委員会企画シンポジウム

『物理からみた植物のかたち：植物の生態とバイオメカニクスの架け橋』

12月13日（土） 企画者：甘田岳（森林研究・整備機構）、前田将輝（拓殖大学）、松本哲也（茨城大学）

植物の「かたち」は、植物の多様性を記述する上で重要な形質であるだけでなく、ときにさまざまな環境因子に対する適応進化の結果でもあります。こうした形態形質の機能的側面を評価することは、植物の多様化において「かたち」が果たした役割を理解する手助けとなる一方、それぞれの形態形質はじつに多種多様な機能を担うため、その適応的意義はさまざまな観点から捉える必要があります。特に、地球上のあらゆる植物が影響を受ける物理環境との関係を定量化することは、「かたち」の適応的意義を解明する有効なアプローチの一つです。しかし、日本国内では、大学受験における理科の科目選択などの影響もあり、生物と物理の双方を学ぶ機会に限られ、そのためか学問分野として生態学と物理学との間にも関心や研究手法の乖離が生じています。一方、世界的には、生物の進化を物理学的、特に力学的な側面から理解する「**Evolutionary Biomechanics**」の研究が近年活発化しており、植物においても、従来の生理生態学的アプローチだけでは捉えきれなかった形態形質の機能や進化を明らかにする研究が進展しています。

本シンポジウムでは、植物の生態やその進化における力学的側面に焦点を当て、力学の視点を導入することで初めて理解可能となった、植物の「かたち」に関する先端的な研究例を紹介します。植物の形態形質が、重力や流体といった物理環境とどのように相互作用し、その機能と結びついているのかを紹介することで、植物の生き様を物理学的に捉えなおす新たな視点を提示します。本企画を通じて、特に学生や若手研究者に、物理学的に植物の生き様を考察することの面白さと、その秘めたる可能性を実感していただくとともに、力学的な評価手法への関心を高めることを目指します。また、こうした研究を実践する国内研究者の活動を幅広く紹介することで、生態学と物理学を横断する研究ネットワークの形成を促し、将来の研究者が両分野を融合した学際的研究に取り組むきっかけを創出します。これにより、日本国内における植物の「かたち」に対する力学的研究が更に活性化することを期待します。

講演者（五十音順）・講演タイトル：

小野田 雄介（京都大学大学院 農学研究科 森林科学専攻）

「薄くても丈夫な葉っぱの秘訣」

島 弘幸（山梨大学大学院 総合研究部 生命環境学域）

「壊れない竹、ひび割れるメロン — 植物のかたちをつくる力学」

津川 暁（北海道大学大学院 工学研究院 機械宇宙航空工学部門）

「形態空間解析で読み解く植物のカタチの意味～花びらの細胞ゆらぎ・茎の姿勢制御・ハエトリソウの内反り～」

友部 遼（埼玉大学大学院 理工学研究科 環境社会基盤部門）

「倒伏の物理数値解析から作物育種への展開」

中山 尚美（沖縄科学技術大学院大学 生物デザインユニット）

「タンポポの種子の構造・機能と未来予測」

前田 将輝（拓殖大学 工学部 機械システム工学科）

「植物の空気力学をはじめよう：光合成・散布・匂いの拡散におけるカタチと機能」

宮下 彩奈（森林研究・整備機構 森林総合研究所 森林災害・被害研究拠点）

「力学的計測を樹木の生態学に－ひずみゲージを利用した計測例の紹介」

※詳細なタイムテーブルは検討中です。

●参加・ポスター発表申し込み【11月4日（水）まで】

シンポジウムウェブサイト (<https://sites.google.com/view/sssb58/>) をご参照のうえ、お申し込みください。

- － 参加費、宿泊・食費については、シンポジウムウェブサイトに掲載します。
- － 新幹線の最寄り駅は上越妙高駅です。12月11日と12月13日は上越妙高駅と会場間をバスで送迎します。利用を希望される場合は、参加申し込みの際に登録してください。

バスによる送迎 (予定)

12 月 11 日 ①12:40 上越妙高駅発 → 13:20 会場着

②14:40 上越妙高駅発 → 15:20 会場着

③16:30 上越妙高駅発 → 17:10 会場着

12 月 13 日 14:55 会場発 → 15:35 上越妙高駅着

- 自家用車でお越しの際は、雪道にご注意ください。
- 託児を利用される方は、参加申し込みの際にお申し込みください。ご家族での宿泊、子ども用の食事についてもご相談ください。
- 今回のシンポジウムは、非会員でも聴講いただけますが、ポスター発表は種生物学会員に限って受け付けます。
- ポスター発表を希望する方は、参加申し込みフォームで「ポスター発表を申し込む」にチェックをしてください。ポスター発表の申込者（発表者）は、2026 年度分の種生物学会会費を納入済の会員に限りま
- 非会員の方でポスター発表を希望の方は、事前に種生物学会への入会をお済ませください。入会手続きは、種生物学会ホームページから行うことができます。ホームページの入会案内にしたがって、今年度分の会費を 11 月 4 日（水）までにお振り込みください。会費の振り込みが確認できない場合は、発表申込みをキャンセルさせていただく可能性があります。
- ポスター発表が優れていた発表者には、「種生物学会ポスター賞」および「河野昭一ポスター賞」を授与しています。「河野昭一ポスター賞」は、発表者を学部学生および修士課程の大学院生に限定したポスター賞です。

● ポスター発表要旨の登録

- シンポジウムウェブサイト (<https://sites.google.com/view/sssb58/>) の「発表を希望される方へ」をご参照ください。

● ポスター発表について

- 現地でのポスター掲示により発表を行います。ポスターボードは A0 の縦型です。
- 12/12（土）午前中にポスターコアタイムを行います。受付直後から掲示が可能です。
- 12/11（金）夜に交流会を行います。ポスターを前に、種生物学会ならではのアットホームな研究交流の場となることを期待しています。

● 発表言語について

- 本シンポジウムには海外からの参加者も来場します。ポスター発表では、発表者・来場者が互いに学び合えるよう、言語の壁を越える工夫を歓迎します。英語が流暢である必要はありません。相手の研究者に伝える工夫が重要です。研究交流をより開かれた場にしていきたいと思います。
- ポスターを準備する上で、次のいずれか一つでも取り入れていただければ幸いです。
 - タイトル、要点、図表を日英併記または英語で作成 ←推奨
 - ポスターの全面英語化
 - 日本語で作成する場合、英語翻訳した A4 別刷りの準備
 - 研究室での英語質疑の練習

● 要旨集について

- 要旨集は PDF で発行します。参加者には、電子媒体の要旨集がダウンロードできる URL をご連絡します。

● 第 58 回種生物学シンポジウム実行委員会（五十音順）

石崎智美（新潟大学）、志賀隆（新潟大学）、高野宏平（長野県環境保全研究所）

問い合わせ先：sssb2026niigata at gmail.com（at を@に置き換えて下さい）

第 59 回 種生物学シンポジウム開催について（予報）

第 59 回目となる 2027 年の種生物学シンポジウムは、2027 年 12 月 3 日（金）～5 日（日）に、香川県東かがわ市の「瀬戸内リゾートベッセルおおち」にて開催されます。香川県での開催は初めてとなります。開催方式やシンポジウムの詳細については、今後決定次第お知らせいたします。

第 57 回種生物学シンポジウム（東京）の記録

2025 年 12 月 19 日（金）～21 日（日）オンサイト・ハイブリッド開催 （国際シンポジウムのみハイブリッド開催）

参加者：現地 145 名（学会参加者 139 名、同伴家族 6 名、うち宿泊者 126 名）、オンライン 75 名。国際シンポジウムには日本国内から 47 名、他 12 か国から計 28 名がオンラインで参加
ポスター発表：計 72 件（うち学生 43 件）

片岡奨励賞受賞講演

勝原光希（岡山大学）送粉者を介した繁殖干渉下における在来近縁種の共存機構：ツユクサとケツユクサを例に

国際シンポジウム（実行委員会シンポジウム）

『The Frontiers of Floral Mimicry in Asia（アジアの擬態花研究の最前線）』
企画者：望月昂（東京大学）

望月昂（東京大学）Dying-ant mimicry in *Vincetoxicum nakaianum*: a new evolutionary consequence of adaptation to fly pollination
Ming-Fai Liu（Kadoorie Farm and Botanic Garden, Hong Kong）From leaf litter to injured insects: how flowers achieve the extraordinary feat of deception
Aroonrat Meekijjaroenroj Kidyoo（Chulalongkorn University, Thailand）When an asclepiad flower disguises itself as a fig: pollination by brood-site mimicry in *Heterostemma ficoides* (Apocynaceae)
砂川勇太（東京大学）Gall midge pollination in *Oberonia*: a possible mimicry case?
奥山雄大（国立科学博物館）Elucidating the genetic basis of evolutionary novelty associated with floral mimicry
総合討論

和文誌シンポジウム・特別講演

『生態系の土台：植物と微生物が織りなす世界』
企画者：中野亮平（北海道大学）、松岡俊将（京都大学）

杉山賢子（京都大学）外生菌根菌の種生物学？群集データから見る菌根菌と植物の相互作用
橋本陽（理化学研究所）系統分類と種生態の狭間から眺める植物-菌類相互作用
執行宣彦（森林総合研究所）ローカル・マイクロバイオームの役割解明と森林生態系理解への貢献
中村直人（京都大学）根圏ケミカルコミュニケーションから迫る植物-微生物間相互作用
西田帆那（農業・食品産業技術総合研究機構）土の中で育まれるマメ科植物と根粒菌の相互作用を考え

る
市橋泰範（理化学研究所）種を超えて紡がれる土壌・植物・微生物のシステム生物学
特別講演：南澤究（東北大学）植物と土壤生物による窒素循環の学際研究：ゲノムと物質循環をつなげるか？
パネルディスカッション
総合討論

ポスター発表

秋本香奈子（お茶の水女子大）、児玉円（お茶の水女子大）、田中啓介（東京情報大）、甲山哲生（東大）、松林圭（酪農学園大）、秋田晋吾（北大）、岩崎貴也（お茶の水女子大）海流分散による接続性が形づくる海浜植物 3 種の遺伝構造：東日本太平洋側での解析
池田周生（名城大）、鷺見那由他（名城大）、江口則和（人間環境大）、鈴木康弘（NPO 法人愛猟）、大崎晴菜（名城大）土地利用はニホンジカのロードキル分布をどのように規定するのか？
Anna K. Valchanova（東大・院・理）、柿嶋聡（昭和・富士山麓自然・生物）、奥山雄大（科博・筑波実験植物園）花から放出されるテルペン類はカンアオイ属における送粉者媒介の種分化にどのように寄与するのか *種生物学ポスター賞
太田千晴（東大）、番場大（静岡大）、佐藤修正（東北大）、土松隆志（東大）ミヤコグサと根粒菌の共生が互いの適応度にもたらす影響：ゲノム解析と単独・混合接種による検証
大坪雅（京大）、西尾治幾（京大・滋賀大）、工藤洋（京大）、本庄三恵（京大）多年生草本ハクサンハタザオへのカブモザイクウイルス感染は媒介昆虫アブラムシを減少させる
奥井七央子（東大・院・理）、奥山雄大（科博・筑波実験植物園）チャルメルソウ属における花の香りによる送粉者誘引の再検証：長鎖炭化水素類の役割に着目して
角田史也（京大）、佐竹まどか（宇都宮大）、亀田果夏（京大）、仲渡千宙（広島大）、手塚詩織（東京農工大）、金原蓮太郎（京大）、南川未来（京大）、榊原未桜（京大）、Negin Eslamibidgoli（京大）、柴田尚輝（京大）、伊勢上さくら（東京理科大）、福田滯李（東京農業大）、半谷吾郎（京大）サルによる食害がツバキの結果に与える影響
金子拓斗（京大・生態研）、金普文（京大・生態研）、山尾僚（京大・生態研）シロイヌナズナにおける競争者の遺伝的類似度に応じた生理応答
河内凜太郎（新潟大）、船久保栄彦（株式会社ミクリ）、

石田真也 (株式会社ミクリ)、井形誠 (株式会社いにしえ)、西川真承 (龍谷大)、塩尻かおり (龍谷大)、石崎智美 (新潟大) 植物間コミュニケーションを稲作に導入するための実証実験
河野菜々美 (日大)、満行知花 (宮崎国際大) 宮崎では在来タンポポそっくりな雑種が多い!? ~タンポポ調査・西日本 2025 宮崎県調査結果より~
Bo-Moon Kim (京大・生態研)、Takuto Kaneko (京大・生態研)、Akira Yamawo (京大・生態研) 血縁認識が生育段階全般にもたらす多様な効果
楠実友 (東京農業大・院)、船本大智 (東京農業大・院)、三井裕樹 (東京農業大・院) 長い口吻を持つスズメガはカラスウリの主要な送粉者であるのか?
児玉円 (お茶の水女子大)、秋本香奈子 (お茶の水女子大)、須貝杏子 (島根大)、田中啓介 (東京情報大)、成田あゆ (北海道立総合研究機構)、首藤光太郎 (北大)、岩崎貴也 (お茶の水女子大) 外来種オニハマダイコンの日本での分布拡大過程: MiCAPs 解析と海流分散解析から
小見山紗英 (岡山大)、藤原日向 (岡山大)、山口寛登 (岡山大)、中田和義 (岡山大)、勝原光希 (岡山大) 都市域と中山間地域に生育する在来一年草ツユクサの開花フェノロジーの予測可能性
榊原正宗 (兵庫県立大)、速水将人 (道総研・林業試験場)、大脇淳 (桜美林大)、中濱直之 (兵庫県立大・人と自然の博物館) 北海道東部の防風林は絶滅危惧種ゴマシジミの分散障壁かコリドーか?
澤田彪 (麻布大・環境科学科)、新田梢 (麻布大・環境科学科) 道保川公園に自生するキンラン属 *Cephalanthera* 3 種の生育状況と環境要因の評価
白井利空 (岡山大)、中田和義 (岡山大)、勝原光希 (岡山大) フェンスへの巻き付きが自生するつる植物 3 種の成長や葉形質に与える影響
添田透真 (東大・理・生物)、望月昂 (東大・理・植物園)、川北篤 (東大・理・植物園) イチョウの種子散布生態: イチョウの種子はなぜ臭いのか
田島結奈 (琉球大・院)、傳田哲郎 (琉球大・理) コナミキ *Scutellaria guilielmii* (シソ科) の自動自家受粉機構 *PSB 推しポスター
田附優実 (奈良女子大)、井田崇 (奈良女子大) 熱波はマルハナバチの花色選択などの採餌行動を変化させる
田中ひなた (岐阜大・院・自然科学技術)、川窪伸光 (岐阜大・応用生物科学)、玉木一郎 (岐阜大・応用生物科学) ミゾソバの花色変異の実態把握 *河野昭一ポスター賞
張瑞琪 (東北大) 南西諸島におけるアザミ属の花色分化と訪花者色覚モザイクの予備的評価
鶴田萌 (琉球大)、小林峻 (琉球大)、伍淑恵 (台湾農業部林業試験所)、Charan Leeratiwong (Prince of Songkla University)、Sopark Jantarit (Prince of Songkla University)、Somsak Panha (Chulalongkorn University)、齊藤由紀子 (琉球大)、伊澤雅子 (琉球大)、傳田哲郎 (琉球大) 沖縄

島に産するワニグチモダマ *Mucuna gigantea* の花形態の観察と裂開者の特定
長濱永実 (神戸大)、平山楽 (神戸大)、吉原知哉 (神戸大)、武田和也 (山梨県富士山科学研究所)、源利文 (神戸大)、丑丸敦史 (神戸大) 送粉昆虫モニタリングの手法間比較: 同定精度及び記録訪花頻度に注目して
南家楓子 (奈良女子大)、井田崇 (奈良女子大) 受粉成功が散布体形質の変異を介して種子散布へ与える影響
西澤空 (東大・理・生物)、望月昂 (東大・理・植物園)、川北篤 (東大・理・植物園) ホタルカズラ (ムラサキ科) がもつ花卉蛍光の特性と機能の解明
萩原香月 (麻布大・環境科学科)、新田梢 (麻布大・環境科学科)、高田久美子 (麻布大・環境科学科) 夏季から秋季にかけてみられる樹木葉の葉緑素量の季節変化
濱野友 (兵庫県立大・院・環境人間)、普天間ちおり (長崎大・院・総合生産科学)、神田旭 (山口大・院・創成科学)、大庭伸也 (長崎大・院・総合生産科学/人文社会科学域・教育学系)、石田弘明 (兵庫県立大・院・環境人間/人と自然の博物館)、中濱直之 (兵庫県立大・院・環境人間/人と自然の博物館) 島嶼部の隔離によってカブトムシの遺伝構造は変わるのか?
深野哲也 (琉球大・院)、森信之介 (慶應義塾大)、陳子浩 (台湾生物多様性研究所)、朱汶偵 (台湾生物多様性研究所)、傳田哲郎 (琉球大) ハシカンボク *Bredia hirsuta* の二型雄蕊における分業の検証 *種生物学ポスター賞 *PSB 推しポスター
福山亮部 (京大)、大河龍之介 (鹿児島大)、田金秀一郎 (鹿児島大)、野依航 (京大)、伊與田翔太 (京大)、RAKOTOARIZAFY Ny Tiavina (アンタナナリボ大)、佐藤宏樹 (京大) マダガスカルのトカゲによる果実食と開けた環境への指向性種子散布の可能性 *種生物学ポスター賞 *PSB 推しポスター
古谷勝実 (麻布大・環境科学科)、楳内一寿 (麻布大・環境科学科)、新田梢 (麻布大・環境科学科) 異なる明暗周期がキスゲとハマカンゾウの開花・閉花時刻に与える影響
星野佑介 (東北大)、堀江佐知子 (東北大)、堂園いくみ (東京学芸大)、牧雅之 (東北大) 外来種の由来地域の違いによる在来種の雑種形成・同種交配阻害パターンの変動
前田将輝 (拓殖大・工)、カヴァディル ルイス 耕史 (拓殖大・院・工) 個葉の迎え角や振動が CO₂ 吸収を促進する空気力学的メカニズム: 数値流体力学による検討
松下智哉 (株式会社緑生研究所)、指村奈穂子 (山梨大) 新潟県阿賀野川流域におけるエビネとナツエビネの生育環境の違いについて
松本康汰 (拓殖大・院・工)、前田将輝 (拓殖大・工) ゼニゴケの形態と地面境界層が胞子の風散布に与える影響 *河野昭一ポスター賞

三宅慶典（東京都立大）、深野裕也（千葉大）、田村浩一郎（東京都立大）、立木佑弥（東京都立大）シロツメクサの HCN クライン形成における自然淘汰と遺伝子流動の役割

宮崎吏功（麻布大・環境科学科）、新田梢（麻布大・環境科学科）埋土種子を用いた湿地再生～道保川公園における土壌深度撒き出し条件の検討

武藤和（東大・理）、津田吉晃（筑波大・生命環）、石川直子（東北大・農）、陶山佳久（東北大・農）、土松隆志（東大・理）日本在来ナス属植物の繁殖生態および花形態進化の解明

村山柊（新潟大・院・自然）、櫻井裕介（新潟大・院・自然）、西川孝一（新潟大・農）、塩尻かおり（龍谷大・農）、高林純示（京大・生態圏センター）、石崎智美（新潟大・院・自然）VOC 暴露がもたらす利益とコストは環境により変化する

山口万里花（東大）、高橋秀男（東京都東久留米市）、菊地波輝（豊橋市自然史博物館）、吉田貴大（愛媛大）、村上哲明（兵庫県立人と自然の博物館）、奥山雄大（科博・筑波実験植物園）イワボタン列ークチナガハバチ属共生系における花形質と送粉者形質の相互局所適応の可能性

平野龍明（岐阜大）、菅川和貴（岐阜大）、山本義治（岐阜大／理研 CSRS）全ゲノム重複後の種分化により砂浜～高山に分布するヤマハタザオ属（*Arabis*）3 種のゲノム比較研究

横川寛太（弘前大）、池本美都（弘前大／国立環境研）、橋本洸哉（弘前大／国立環境研）寄主植物の質と量がイチゴハムシの生存と資源利用に与える影響

吉塚海音（東京学芸大）、星野佑介（東北大）、牧雅之（東北大）、堂園いくみ（東京学芸大）カタバミ種子の休眠打破と発芽条件—山間部と都市部の比較

大塚なつみ（新潟大）、石崎智美（新潟大）、渡邊幹男（愛知教育大）、砂押あゆみ（愛知教育大）、神戸敏成（龍谷大）、大原隆明（富山中央植物園）、田川一希（鳴門教育大）、内田葉子（北海道立総合研究機構）、大原雅（北海道環境財団）ハルリンドウの生活史特性とその地理的変異

甘田岳（森林研究・整備機構）、小林秀樹（海洋研究開発機構）、野口享太郎（森林研究・整備機構）永久凍土林の植物は地下部で棲み分けをしているか？—細根と土壌栄養の深度分布の観点から—

伊藤道彦（北里大・理）、須田皓介（北里大・理）、松尾拓哉（北里大・理）両生類の異種交配から“種とは何か”を分子レベルで考える ～ 利己的 DNA による異種ゲノム間闘争 ～

勝原光希（岡山大）、篠原直登（OIST）、松本哲也（茨城大）送粉者の個体群サイズ縮小がだまし送粉系における送粉者シフトを伴う種分化を促進する

金丸聡大（麻布大・環境科学科）、新田梢（麻布大・環境科学科）外来植物ノハカタカラクサの抜き取りによる防除方法の検討

塚原一颯（鶯谷中学・高等学校）、川窪伸光（岐阜大）見えていて観えない花と昆虫の関係：観察者が阻

害する花内生息アザミウマ行動

川地佳代（名古屋工業大・院）巻きつき型・巻きひげ型つる植物の回旋運動

北村系子（森林総研・北海道支所）、逢沢峰昭（宇都宮大・農）、高橋大樹（東北大・院・農／現・九大・院・農学研究院）、陶山佳久（東北大・院・農）アカエゾマツの分布変遷における集団分化と遺伝的多様性の喪失

工藤葵（京大）、夏目俊（岩手生工研）、杉原優（The Sainsbury Laboratory）、加藤大明（京大）、阿部陽（岩手生工研）、及川香梨（岩手生工研）、清水元樹（岩手生工研）、伊藤和江（岩手生工研）、辻村真衣（龍谷大）、寺地徹（京都産業大）、堺俊之（京大）、太田敦士（京大）、寺内良平（京大／岩手生工研）雌雄異株植物オニドコロにおける性決定候補遺伝子の特定

工藤洋（京大）、中平勝也（百一草園）、大崎豊明（須崎市上分）、大崎益子（須崎市上分）、高山浩司（京大／東京都立大）、野田博士（京大）、Tae-Soo Jang（忠南大学校）、藤井伸二（人間環境大）、前田綾子（高知県立牧野植物園）高知県で発見されたタネツケバナ属の新種、タキミコンロンソウ（*Cardamine brevicaulis*）

坂田ゆず（横浜国立大・環境情報研究院）横浜市内 3 箇所の都市林における訪花昆虫相

高野（竹中）宏平（長野県環境保全研究所）、武田和也（山梨県富士山科学研究所）、岩崎公典（琉球大・熱生研）、森信之介（慶應義塾大・理工）、佐藤終介（北大・院・理）、裕間太雅（北大・院・理）、志垣俊介（国立情報学研究所）、山尾僚（京大・生態研セ）ラズパイ 4 を用いたマルチモーダル（熱・可視光・赤外線）タイムラプスカメラの開発：1 秒間隔で 1 週間の昼夜連続撮影を目指して

指村奈穂子（山梨大・土木環境工学）、鈴木正樹（日本自然環境専門学校）、古本良（林木育種センター）、内貴章世（琉球大・熱生研）攪乱により維持される希少樹種（クロボウモドキ・クサミズキ・シマソケイ）の更新環境—UAV 写真による三次元的林冠構造を用いた比較—

高橋晃太郎（京大）、布施静香（京大）、野田博士（京大）、矢野興一（岡山理科大）、池田博（東大）、Sawita Yooprasert（BKF, Thailand）、Manop Poopath（BKF, Thailand）、Keshab Raj Rajbhandari（National Herbarium, Nepal）、Yong-Ping Yang（Chinese Academy of Sciences, China）、田村実（京大）スゲ属スゲ亜属基部系統における節認識の再検討と花序形態の進化

常木静河（愛知教育大）、鈴木優実（愛知教育大）、山内寧々（愛知教育大）、高柳楓（愛知教育大）、芹沢俊介（愛知みどりの会）カワデシャ個体内の開花順と雄しべ雌しべの接触時間

永光輝義（森林総研）高次倍数体やエガワカンバの遺伝型・表現型変異における日本列島の隔離分布集団と北東アジアの大陸集団の比較

中村祥子（森林総研）、安田和真（東京農工大）同所

的に生育するスミレ 2 種の繁殖特性比較
 福田知子 (三重大)、森田奈菜 (三重県総合博物館)、
 Linnik Elena (国後保護区) クロクモソウの訪花
 昆虫の観察
 船本大智 (東京農業大・農) ハスノハイチゴの果実
 食者
 古川沙央里 (京大)、趙光辰 (韓国国立生態院)、酒
 井章子 (香港浸会大) 栽培化は種子微生物相をど
 のように変えたのか ダイズとツルマメの比較
 本庄三恵 (京大)、工藤洋 (京大) 自然環境下におけ
 る植物のストレス応答遺伝子の発現に対するウイル
 ス感染の影響
 前川奈々子 (岡山大)、田代美羽 (茨城大)、宮崎祐
 子 (岡山大)、廣部宗 (岡山大)、松本哲也 (茨城
 大) 落とし穴式花序における倒伏からの起き上がり
 運動
 満行知花 (宮崎国際大)、石川直子 (東北大)、鈴木
 武 (兵庫県立人と自然の博物館)、陶山佳久 (東北
 大) 宮崎県に生育する不明な在来タンポポの集団
 遺伝学的位置付け～MIG-seq 法による西日本産在
 来種との比較～
 宮本通 (東大・院・理・植物園)、望月昂 (東大・院・
 理・植物園)、川北篤 (東大・院・理・植物園) ア
 ジア・太平洋熱帯域におけるタコノキ科とハナケ
 シキスイ属の相互作用
 村中智明 (名古屋大)、桑名隆文 (名古屋大)、服部
 宗太 (名古屋大) 日本産アオウキクサ種複合体の
 解析
 森信之介 (慶應義塾大)、妥玖和佑悟 (慶應義塾大)、

徳田誠 (佐賀大)、犀川陽子 (慶應義塾大) ブナ属
 寄生タマバエの分子系統：適応放散と寄主転換の
 歴史
 山口夏美 (奈良女子大)、井田崇 (奈良女子大) 環境
 傾度に沿った生産戦略と二型性閉鎖花を含む繁殖
 戦略の変異
 渡部俊太郎 (鹿児島大・理)、二町侑樹 (鹿児島大・
 理) 同所的に分布するホトトギス属 3 種の受粉前
 生殖隔離機構
 古知美咲 (日本生態学会 PSB 編集部)、久米篤 (日
 本生態学会)、三宅崇 (PSB 編集長) Plant Species
 Biology のこれから

ポスター賞受賞者

<種生物学会ポスター賞>

Anna K. Valchanova (東大・院・理)
 深野哲也 (琉球大・院)
 福山亮部 (京大)

<河野昭一ポスター賞 ※>

田中ひなた (岐阜大・院・自然科学技術)
 松本康汰 (拓殖大・院・工)

※ 筆頭発表者を学部学生と大学院生 (修士) に限
 定した奨励的ポスター賞です。

<PSB 推しポスター>

田島結奈 (琉球大・院)
 深野哲也 (琉球大・院)
 福山亮部 (京大)

会計報告

2025年度種生物学シンポジウム (東京)

収入の部

費目	金額
参加費	3,385,831
種生物学会よりシンポジウム補助金	300,000
MICE開催助成金 (八王子市)	526,000
小計	4,211,831
前年度繰越金	554,945
合計	4,766,776

2025年度 (第57回) 種生物学シンポジウム実行委員会の会
 計に関し、会計帳簿、証拠書類 (領収書、参加費受付記録
 等) および通帳を監査照合した結果、収支とも適正に執行され、
 帳簿に適正に表示されていることを認めます。

令和8年6月11日

2025年度会計幹事 樋口裕美子



支出の部

費目	金額
会場費 (施設使用料)	639,169
会場費 (宿泊費)	1,554,630
会場費 (食費)	587,900
会場費 (懇親会費)	412,500
飲料・食料費 (二次会・休憩スペース用)	252,228
アルバイト費	242,172
講演料	330,000
賞品・記念品費	66,792
交通費	10,720
消耗品費	33,688
事務費	2,065
小計	4,131,864
次期繰越金	634,912
合計	4,766,776

事務局からのお知らせ

電子メールアドレス更新のお願い——

種生物学会では、さまざまな情報を電子メールで配信しています。メッセージが届かない方は、電子メールアドレスが登録・更新されておきませんので、事務局までご連絡ください。（庶務幹事 本庄三恵）

事務局の連絡先は office@speciesbiology.org です

学会会計報告

種生物学会 2025年度 決算

期間: 2025年1月1日～12月31日

収入の部	2025年予算額	決算額
国内会員会費	1,600,000	1,581,000
著作権料	100,000	127,696
その他	10,000	5,666
小 計	1,710,000	1,714,362
前年度繰越金	9,060,460	9,060,460
合 計	10,770,460	10,774,822
収入その他(利息5666)		

支出の部	予算額	決算額
出版費	1,000,000	994,840
和文誌46号	1,000,000	994,840
事務費	260,000	204,829
発送費	80,000	85,539
冊子発送作業費	30,000	7,200
和文誌編集業務	100,000	100,000
その他	50,000	12,090
ウェブサイト維持管理費	129,000	244,640
シンポジウム補助金	300,000	300,000
片岡奨励賞副賞	100,000	50,000
PSB論文賞副賞・郵送料	30,000	23,558
交通費	70,000	0
学会選挙費用	0	0
自然史学会連合分担金	20,000	20,000
日本分類学会連合分担金	0	0
男女共同参画連絡会分担金	10,000	10,000
予備費	20,000	0
小 計	1,939,000	1,847,867
次期繰越金	8,831,460	8,926,955
合 計	10,770,460	10,774,822

会員数 (2026年8月31日時点)

個人会員	326
一般会員	278
学生会員	48

種生物学会 2026年度 予算

期間: 2026年1月1日～12月31日

収入の部	2026年予算額
国内会員会費	1,600,000
著作権料	100,000
その他	10,000
小 計	1,710,000
前年度繰越金	8,926,955
合 計	10,636,955

支出の部	2026年予算額
出版費	1,180,000
和文誌47号	1,000,000
片岡奨励賞受賞者 PSB寄稿料	180,000
事務費	260,000
発送費	80,000
冊子発送作業費	30,000
和文誌編集業務	100,000
その他	50,000
ウェブサイト維持管理費	141,000
シンポジウム補助金	300,000
シンポジウム参加費軽減経費	500,000
片岡奨励賞副賞	100,000
PSB論文賞副賞・郵送料	30,000
交通費	70,000
学会選挙費用	0
自然史学会連合分担金	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000
予備費	200,000
小 計	2,821,000
次期繰越金	7,815,955
合 計	10,636,955

(会計幹事 樋口裕美子)

種生物学会ニュースレター 第 59 号

発 行 種生物学会
<http://www.speciesbiology.org/>

編 集 本庄 三恵 (庶務幹事)
〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
京都大学 生態学研究センター
種生物学会事務局

発行日 2026 年 10 月 11 日